

## 受容の意味を知った日

私の父は、私が中学生の頃に病気を患い大きな手術をし、5年前に亡くなった。父が病気になったころから父と私の関係は決して良好とは言えず、お互い歩み寄れないままの別れとなってしまった。当時の私は病気で内面や身体的に変わっていく父を見て、それを理解することができず、心の距離を置いてしまっていた。しかし、父がいなくなった後に残ったのは、拭いきれない後悔、疑問だった。「もしあの時、私が父の病気を正しく理解し、その苦痛や不安を察することができていたなら、私たちの関係性はもっと違ったものになっていたのではないか」。この消えない問いが、社会人を経て私が看護の道を志した原点だ。

しかし、いざ看護の世界に飛び込んでみると、自分の中に予想していなかった感情が芽生え始めた。講義や実習で繰り返される「患者に寄り添う」「受容する」といった綺麗な言葉の数々、そして理想的な看護師像を求める倫理教育に対し、どこか冷めた反抗心を抱くようになったのだ。一度社会に出て、人間の綺麗事だけでは済まないドロドロした部分も見えてきた私にとって、教科書の中の看護師像はあまりに聖職者的すぎて、現実味を欠いているように感じられた。「そんな簡単に、他人の人生を丸ごと理解し、受け入れられるはずがない」という冷めた視点がどうしても消えなかった。

そんな葛藤を抱えたまま、三年生の冬、最後の実習で終末期の患者を担当することになった。その患者は、自身の病状に理解を示しつつも、まだどこかで治る希望を持っているように見えた。しかし日ごとに強くなる痛みとの間で気持ちが大きく揺れ動いていた。その苦痛は、学生である私への怒りや拒絶となって現れた。その時、私の心は父との関係へと引き戻される感覚になった。しかし、かつての自分と決定的に違ったのは、今の私には看護の知識があり、患者の言動の背景を察しようとする視点があることだった。患者があらわす言動は、私個人への攻撃ではなく、逃れられない現実から生まれた叫びなのだと気づいた瞬間があった。そのとき、ずっと反発していた「受容」という言葉の本当の意味が、ようやく少しだけわかった気がした。それは、相手の感情をきれいに整えて受け取るのではなく、相手が抱える苦痛や叫びをありのままに受け止め、私自身がそこから逃げずに踏みとどまる覚悟のことではないだろうか。

教育への反抗心の正体は、安易な「わかったつもり」になりたくないという、私なりの誠実さだったのかもしれない。人間は、他者の苦しみを完全に理解することはできない。しかし、その「わからなさ」や「痛みの記憶」を抱えているからこそ、目の前の患者が抱く孤独や怒りに、深い敬意を持って向き合えるのだと感じた。

父への後悔や教育に感じた違和感も自分の経験として受け止めながら、これからも患者の隣に立ち、自分なりの答えを探し続けていきたい。